

令和5年度熊野古道協働会議・分科会 発言要旨

○第1回分科会（令和5年8月9日開催） p. 2

○第2回分科会（令和5年12月27日開催） p. 5

令和5年度熊野古道協働会議・第1回分科会 発言要旨

日時：令和5年8月9日（水）15時～17時

場所：三重県立熊野古道センター 小ホール

*事務局において、意見交換での発言要旨を内容ごとにまとめました。

「○印」は参加者からの意見、「●印」はその意見をふまえた意見交換・質疑応答のまとめです。

【紀北町熊野古道連合会】

- 紀北町には4つの保全団体があるが、近年は会員の減少や高齢化等により単独での活動が困難になってきており、今年4月に連合会を発足した。
- 共同で各峠のパトロールを行って、改善が必要な3か所を選定し、9月以降に景観整備をしていく。集客交流事業についても、運営スタッフと予算を集結して、各峠で順番に共同開催する予定。
- 組織を大きくすることで周知効果が高まったり、地域に対する経済波及効果にもつながればと思いい、連合会を設立したが、後継者がいないため、会員を増やせるよう検討していきたい。

【伊勢路全体の保全を統括する組織】

- 紀南エリアでは、保全団体は少人数のところが多く、紀北町の先行事例に学びながら、連合会をつくっていきたい。
- 熊野古道伊勢路を守る会は北部4町にまたがっているが、町ごとに保全に対する取組や考え方が違い、まとめるのは大変難しく感じている。今日は伊勢路全体の保全を組織化していくことを協働会議の分科会で検討しているが、保全体制は市町毎で違いがあるため、保全団体だけで進めるというのではなく、市町の行政も入ってもらって進めた方が効率が良いのではないかと思う。
- エリアごとに、熊野古道サポーターズクラブのような応援団があるとよいのではないか。自分たちの活動だけではPR力が弱く、まずはサポーターから入って、後継者を集める方法もあると思う。
- 伊勢路全体で熊野古道サポーターズクラブがあり、各峠に応援団があっても乱立してしまう。メールマガジンがあるので、各保全団体の活動について発信することはできる。

- 各保全団体では、これまで約 20 年間いろんな活動をされてきたと思うので、その体験を元に、伊勢路全体の望ましい保全体制をつくっていききたい。

【保全活動の望ましいスタンダード（標準）】

- スタンダードを実現するための人員数は妥当だと思う。紀北町の場合、道普請や橋の架け替えの原材料は町が購入して支給するが、各団体で実際に道普請や橋の架け替えをする場合は5万円では足りないと思う。
 - 何かを整備する時の原材料は高額なため、資料のとおりの資金では足りないかもしれないが、最低でも今後 150 万円が必要。支援いただける企業を募って、社員研修や福利厚生で来ていただくことも考えられるので、今後企業との関係を築いていきたい。
- 昨年度に実施した調査によると、各市町で支援状況に違いがあることが分かったので、各市町で話し合いながら、伊勢路全体で標準化された支援体制が必要だと思う。

【担い手確保・資金確保】

- 地域おこし協力隊という制度があるが、熊野古道の保全に取り組んでいる事例はあまり聞いたことがない。外から来る人も交えながら活動していきたい。
 - 地域おこし協力隊は、基本は市町が隊員を採用して、最大3年間の任期で特定のテーマを達成していただき、地域への定着を図る制度。「熊野古道の保全」というテーマもあるかと思うので、役所に相談していただくとよいと思う。
- 地域の祭も担い手が不足している状況のため、県教育委員会では「みえ祭協力隊」を結成して、地域の子どもたちが祭を取材して成果を発表する取組を始めた。このようなマンパワーによる課題解決の方法も考えられる。
- 尾鷲藪漕隊は、尾鷲市街地を囲むトレイルと浦々を結ぶ生活古道を歩けるように整備している。熊野古道は身近な古道なので、月1回でも保全の手伝いができればと思っている。イベント的に整備する機会があれば参加したい。
- 企業がボランティア活動を対外的にアピールするため、成果を報告するのはどうか。報道機関に活動後の写真を送れば、取り上げてくれるところもある。
 - 活動前や活動後に、活動内容や写真等の情報を頂ければ報道機関に資料提供できるので、個別に相談してほしい。

- 来年の世界遺産登録 20 周年に、協力企業に対して、感謝の意を込めて表彰するのはどうか。
- 20 周年については検討中だが、寄付金の贈呈式や、15 周年の式典では保全団体と協力企業に感謝状をお渡しした。

- 協力企業の従業員に峠のウォーキングをセットすれば、PR 力もあると思う。
- 細かい対応は難しいかもしれないが、感謝状をお渡しするだけでなく、福利厚生で来ていただけるようなことも考えたい。

【熊野古道サポーターズクラブ】

- 昨年度、逢神坂峠の活動後に交流会を開催した時に、より多くの人たちに参加してもらうにはどうしたらよいか、という話をした。参加者からは、清掃ウォークだけでなく、語り部と一緒に峠を歩いて懇親を深めるのはどうか、というご意見があり、事務局に語り部とのウォークイベントを提案した。
- 語り部で保全活動をやっている人も多く、持続的な関係性の構築ということで、ぜひ一緒に歩くことができたらと思う。
- サポーターズクラブは保全だけでなく、PR もサポート活動としている。語り部とのウォークイベントに経費が必要であれば、ボランティア精神だけでなく、幅広いご協力を得ながら、企業からの寄付金の使用も検討したい。

- 大吹峠では石畳が大きく毀損しており、文化庁にも相談して、状況を確認するために、5、6月にセンサーカメラを設置した。おそらくタケノコを食べに来たイノシシによる獣害だと思われる。修復方法を検討していくので、サポーターズクラブにも協力してほしい。

【その他】

- 学校教育で熊野古道について積極的に取り入れてもらいたい。将来の担い手となる子どもが自分たちの宝物に気づくことが大事。語り部や保全団体の人が講師となるのはどうか。
- 熊野古道や三重県南部の歴史についての教材を企業と一緒に作ったらどうか。教員用のスライドも作成したら、教える先生の負担軽減にもなる。
- コロナ禍に修学旅行を誘致するために小中学生向けのパンフレットを作成したので、活用していきたい。

令和5年度熊野古道協働会議・第2回分科会 発言要旨

日時：令和5年12月27日（水）10時～12時

場所：三重県立熊野古道センター 小ホール

*事務局において、意見交換での発言要旨を内容ごとにまとめました。

「○印」は参加者からの意見、「●印」はその意見をふまえた意見交換・質疑応答のまとめです。

【持続可能な保全体制の構築】

- 保全団体と行政との連絡が十分に取れているのか、疑問を抱いている。
- 一部の教育委員会は出席しておらず、ほとんど理解されていない状況だと思う。市町教育委員会に働きかけを行っていかないといけない。
- 市町、県、国と協議しながら保全・修繕等を行っていく必要があり、保全団体と行政が連携することは欠かせないと思う。引き続き各市町文化財保護部局の担当者には出席の働きかけを行い続けていく。

- 目標の保全活動計画については、主体が保全団体または市町教育委員会のどちらなのかをはっきりさせないといけない。保全団体は、ボランティアが主体的に活動を行っており、状況が変わると活動を続けられない人もいる。管理事務所を作って、プロが全体を見ていき、ボランティアが協力する体制がいいと思う。

- 保全活動は人から人へ伝えるのではなく、マニュアルを作って伝えていくべきであり、それが文化を守ることだと思う。

【担い手確保】

- 地域の小中高生に保全活動を体験してもらってはどうか。子どもたちに、自分たちの地域には世界遺産があって、保全活動している人がいると認識してもらうことが大事。若い人にも入ってもらえるように、小さい頃から、保全活動が地域の当たり前の活動となる取組が必要だと思う。

- 商工会、商工会議所の青年部と連携しながら、地域貢献として保全活動に関わってもらい、そこから保全団体に入ってもらうことも考えてはどうか。紀北町であれば、アウトドア事業所にも声をかけて、古道歩き客にはアウトドア体験を紹介することで、互いに利益があると思う。

- 保全活動は特定の方の頑張りで成り立っていることを心配している。特定の方に負担が集中しているので、支える人を増やしていきたい。地元の行政関係者や商工、観光関係者にも皆さんと関わってもらい、地域外の支援についても働きかけをしてきたいと思っている。まとめ役の方の負担も減らせる仕組みを考えていきたい。

【資金確保】

- 清掃活動してもらう前には下見を実施するが、下見にも費用がかかるので、ボランティアで持続的にやっていけるのか、疑問に思っている。全体を統括する組織に対して、県からの補助も考えてもらいたい。
- 作業するには、労働賃金のような手当が必要。ボランティアでは続いていかないと思う。紀北町の財政的な支援は素晴らしく、そのような組織づくりが大事だと感じた。
- 頂いている寄附は、東紀州地域振興公社から保全団体への補助金として活用している状況。もう少し支援を募るとなると、全体を統括する組織が寄附を配分したり、全体を管理していけるような形を考えている。
- 保全活動にだけ投資するとマイナスになって成り立たないので、収入源と結びつける組織づくりを考えないといけない。観光業者と連携した活動ができないか。
- 保全活動を観光の目的にできるように、外国人が熊野古道を歩く際に清掃してもらったりしている。旅行会社に働きかけて商品にして、活動時に寄附を頂けるようなシステムを作れるように取組を行っている。

【組織形態】

- 地域の保全団体が活動していくのは当然で、一番大事なことだと思っている。人員が足りない場合等は、エリアごとに組織をまとめて、それを一つにすることに賛成する。
- 各エリアでまとまって、全体を統括する組織がある形がいいと思う。紀北町の事例を参考にしながら、紀南エリアでもできるだけ早く連合組織を立ち上げたい。

【紀北町熊野古道連合会】

- 紀北町熊野古道連合会は、4つの保全団体と、事務局として観光協会、臨海公園の管理組合が入っている。会議に紀北町の担当部署の方に出てもらい、活動内容等をお互いに認識しながら進めている。
- 事務局が書類の作成をしており、会員は作業に集中できるので、組織の事務局は大事だと思う。
- 会議に参加することで、事前に活動内容を把握し、懸念事項について相談したり、保全団体と行政との顔の見える関係性を構築できている。

【まとめ】

- 組織形態の案で進めていくという意識統一ができた。各市町でどう進めていくのかということを決めるまで話を話し合ってもらい、それを踏まえて、各エリアで話し合うことになる。保全団体だけでなく、行政や関連団体等も含めて議論してほしい。全体を統括する組織についても、県が中心となって議論していきたい。